

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (教育学)	氏名	櫃割 仁平
論文題目	曖昧性が俳句の審美性に与える影響：心理学・神経科学的検討		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>独自の表現様式をもつ「俳句」の曖昧性と審美性の関わりについて、本論文は、行動実験や質問紙調査、機能的核磁気共鳴画像法等による9つの認知心理学実験を通じて検討したものである。</p> <p>第1章では、芸術の鑑賞にともなって生じる審美性に関わる理論を概観した。特に芸術鑑賞のプロセスモデル (Leder et al., 2004) と言語芸術のプロセスモデル (Jacobs, 2015)を取りあげた上で、視覚芸術に関わる曖昧性の研究においては知見が錯綜していることを指摘し、曖昧性の種別をふまえて審美性との関わりを検討することの必要性を述べた。</p> <p>第2章では、50名の参加者を対象とした自由記述(俳句鑑賞中に感じた曖昧性)に基づいた質問項目を作成し、オンライン調査の結果をふまえて曖昧性を構成する4つの因子(イメージ、関連、解釈、感情)を見出した。続いて、これら4種の曖昧性のうち「イメージの曖昧性」を取りあげ、277名を対象としたオンライン実験を行った。その結果、俳句の視覚的イメージの鮮明性が高いほどに俳句の審美性が高く評価されることを確認した。さらに多感覚イメージ能力を測定する Plymouth Sensory Imagery Questionnaire (Psi-Q; Andrade et al., 2014) を取りあげ、389名を対象としたオンライン調査の結果にもとづき、構成概念妥当性ならびに再検査信頼性等を担保した Psi-Q の日本語版尺度を開発した。</p> <p>続いて開発した Psi-Q を活用し、44名を対象に俳句と嗅覚との関わりについて検討した。その結果、嗅覚イメージの鮮明に喚起する俳句ほど、審美性が高く評価され、かつ嗅覚イメージ能力が高い個人ほど、俳句により没入傾向の高いことが明らかとなった。さらに128名の参加者が、俳句の創作もしくは標語の評価に取り組んだのちに水墨画への評価を行った結果、水墨画に畏敬の念を介し、その創作困難さの認識がその審美性評価へと影響することが示された。</p> <p>次なる課題は、俳句の鑑賞に伴う脳内活動を検討すべく、39名を対象とした機能的核磁気共鳴画像化法を用いて、俳句の曖昧性・審美性を評価する際の脳活動を検討した。結果、俳句の上五から中七・下五へと段階的に減少する曖昧性が、審美性と正に</p>			

相関すること、審美性の知覚にともない左中側頭回や左縁上回が活性化することが確認された。

続く第3章では、日本語話者群（450名）とドイツ語話者群（373名）に対してオンライン実験を行った結果、両群ともに俳句の曖昧性と審美性における負の相関が示された一方で、曖昧性が審美性を減じる程度は日本語話者において少ないことを確認した。また、俳句の熟達者と非熟達者の各20名を対象としたオンライン実験により、非熟達者は、曖昧性の高い俳句の審美性を低く評価するものの、熟達者においてはその低減が緩和されることが確認された。さらにAIにより生成される俳句に着眼した上で、AIの生成したHuman-Out-of-The-Loop (HOTL)条件、AIの生成結果をふまえて人間が俳句を選定するHuman-In-The-Loop (HITL)条件ならびに人間が作成した俳句条件、これら各々の条件のもとで、参加者385名が各条件の俳句を評価した結果、HITL条件において、HOTL条件等と比して審美性が高く評価されることが確認された。これら第3章で示された結果は、個人差や文化差を考慮する必要性を示すとともに、人間とAIとの共創にかかる可能性を示唆するものである。

第4章では、多次元曖昧性への態度尺度 (Multidimensional Attitude toward Ambiguity Scale; MAAS; Lauriola et al., 2016) の日本語版を作成し、原版と同様の3因子構造（曖昧性への不快感、絶対主義、複雑性・新規性希求）ならびに構成概念妥当性を再検査信頼性ととも確認した。続いて137名を対象とした調査により、MAASの下位尺度（絶対主義）が俳句の鑑賞や創作を経て、その1週間の期間を経て減少していく過程を確認した。さらに俳句創作群（177名）は、俳句非創作群（199名）と比較して、平穩感謝や畏敬の念を感じる傾向の高いことを、俳句の鑑賞や創作にともなう効果であると解釈し、教育や人材開発等への応用を視野に入れた考察を展開した。

第5章では、総合考察として、研究全体のまとめと本研究の学術的および方法論的意義を述べ、曖昧性の類型をふまえることにより言語芸術の審美性に立体的に迫ることのできる可能性などを残された課題とともに議論した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、俳句における曖昧性と審美性の関わりについての多様な手法を駆使した9つの実験を実施し、得られた結果を心理学の構成概念や理論に対応づけ、個人差の観点から総合的に検討したものである。

本論文の特色は以下の3点である。

1. 俳句の曖昧性と審美性の関わりを理解に、工夫に富んだ課題と多彩な指標により貢献している点
2. 質問紙尺度を開発し、俳句の曖昧性が審美性へと転じる過程について、脳の生理学的データ等を包括して多面的にアプローチした点
3. 俳句の創作や鑑賞のもたらす効果とその個人差を明らかにした点

第1章「序論」では、視覚芸術や言語芸術に関わる先行知見や説明モデルを概観した後、言語芸術において俳句を取り上げることの意義を表現様式の観点から述べた。続いて、俳句に内包される曖昧性に着眼し、その審美性との関わりを解明するためには、曖昧性の下位概念や鑑賞者の個人差等を考慮する必要性を述べた点に着眼の鋭さがうかがえる。

第2章では、俳句の準熟達者(経験年数2年以上)に俳句の曖昧性に関わる自由記述をもとめ、KJ法による分類、因子分析の結果をふまえて質問項目を作成した。続いて、俳句の曖昧性は4因子から構成されることを示し、そのうちイメージの曖昧性に関わる鮮明性の高い俳句ほど、そのイメージの視覚、嗅覚の各々感覚モダリティにおいて審美性が高く評価されることを明らかにした。続いて機能的核磁気共鳴画像法により、俳句の曖昧性の解消にともなって審美性が向上すること、その際の脳の中側頭回や左縁上回の活性化を確認した。これらの結果は、審美性の中核にある心的プロセスを、脳機能の観点から新たに示唆する点において注目に値する。

第3章では、曖昧性と審美性との関わりを、所属する文化圏と俳句の熟達化の各々の観点から検討した。その結果、ドイツ語話者と日本語話者は、いずれも曖昧性の上昇にともない俳句の審美性を低く評価するものの、日本語話者における減弱は緩やかであること、その傾向は、俳句の熟達者(と非熟達者との比較)においても同様にみられることを明らかにした。

続いて、AIにより生成される俳句に着眼し検討を行った結果、AIの生成結果を人間が選定した俳句は、人間自らが作成した俳句よりも審美性が高く評価されることが明らかとなった。これらの結果は、審美性の評価にかかわる個人の属性(文化、熟達度)とともに、刺激の属性は、AIと人間との共創にかかわる評価の適正性を考察するうえでの新たな視点を提供するものである。

第4章では、多次元曖昧性への態度尺度 (Multidimensional Attitude toward Ambiguity Scale; MAAS)を開発した。続いて、俳句の鑑賞や創作に伴い、MAASの下位因子である絶対主義傾向)が低下し、その効果は1週間程度に持続すること、さらには俳句を創作する習慣のある個人は、習慣のない個人と比して感謝や畏敬の念を感じやすいこと等を明らかにした。これは俳句に関わる営みが、絶対主義傾向の緩和や自己超越的感情の感受という、根源的な心的傾向へも影響しうることを実証した点で高く評価できる。

第5章「総合考察」では、本研究の学術的意義とおよび方法論的意義を述べ、俳句の審美性に関わる新たな仮説的モデルを提案し、残された課題と今後の研究方向を示した。以上のように本論文は、俳句の曖昧性と審美性との関わりを検討すべく、論者は、幅広い分野の研究成果と問題意識に基づいて、行動実験、質問紙調査、神経画像化法等の技法を果敢に修得・駆使し、実験調査データを積み重ねて議論を構築した。

他方、今後に残された問題として以下の点が指摘された。

- (1) 審美性や曖昧性の概念の精緻化と測定指標の深化
- (2) 実験結果に関わる記述の不足
- (3) 言語構造をふまえた俳句の曖昧性と審美性の関わりへの解析
- (4) 心理・神経科学的データの各々をふまえた統合的モデルの構築

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって本研究は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和6年2月9日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。